審査様式２－１

氏名（本籍）	田村　知栄子（埼玉県）
学位の種類	博士（　ヒューマン・ケア科学　）
学位記番号	博甲第 7064 号
学位授与年月	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	未就学児をもつ母親の妊娠･出産体験と育児をめぐる心理社会的要因

主　査	筑波大学准教授	博士（学術）	橋本　佐由理
副　査	筑波大学教授	医学博士	水上　勝義
副　査	筑波大学准教授	医学博士	柳　久子
副　査	筑波大学教授	博士（医学）	江守　陽子

論文の内容の要旨

（目的）

近年、母親と子どもを取り巻く社会的環境が大きく変化している。妊娠・出産期では、出生率の低下や第２子出産意欲の低下、育児期では、少子化が深刻化する一方で、虐待問題への取り組みなども急務となっている。子育てに悩みをもつ母親は多く、育児不安を訴える母親も多いが、現存の支援は、保育所の拡充や夫の育児参加を促すといったものが中心であり、育児不安の軽減につながっているとは言い難い。そのため今後の育児支援として、何が必要なのかを明らかにしたいと考えた。

そこで本研究では、未就学児をもつ母親の妊娠・出産体験、育児体験認知、自己イメージの関連や影響について検証することを目的とした。

これまでの先行研究を概観した結果、妊娠・出産体験が、母親のウェルビーイングに影響していることが明らかになっている。しかしながら、未就学児をもつ母親の妊娠・出産体験と育児体験認知との関連は検証されていない。また、診療録の記録と母親の妊娠・出産体験の記憶との関連の検証も必要であると考えた。さらに、妊娠・出産体験や育児体験認知には、母親の自己イメージが関連していると考え、妊娠・出産体験や自己イメージが育児体験認知に及ぼす影響についても検証することとした。

本研究は大きく３つの研究課題からなり、研究課題Ⅰでは、未就学児をもつ母親の妊娠・出産体験の記憶と育児体験認知との関連、妊娠・出産体験の記憶と自己イメージとの関連、育児体験認知と自己イメージとの関連を検証することが目的である。研究課題Ⅱでは、診療録の妊娠・出産体験の記録と本人の妊娠・出産体験の記憶との関連、研究課題Ⅲでは、妊娠・出産体験や自己イメージ

が育児体験認知に及ぼす影響を検証することを目的とした。

（対象と方法）

研究Ⅰでは、A・B・C・D・E 市の全公立幼稚園・保育園に通う乳幼児の母親（n=6950, 有効回答率：53.0%，平均年齢：34.01±4.71 歳）を対象とした。妊娠・出産トラブル体験記憶と自己イメージと育児体験認知との関連を明らかにするために平均値の差の検定を行った。

研究Ⅱでは、2009 年にA県Y医院において過去5年間(2004 年～2008 年)に出産した母親（n=682, 有効回答率：51.6%，出産時の平均年齢：31.47±4.39 歳）を分析対象とした。対象者の了解のもとに、妊婦健診および出産時のカルテの照合をおこなった。また、2009 年に調査協力を得られた対象に一年後に追跡調査をおこなった(n=356, 回収率 51.5%）であった。実際の妊娠・出産トラブル体験とその記憶を想起している群での差を検討するために一元配置の分散分析をおこなった。

研究Ⅲでは、研究Ⅰと研究Ⅱと同じデータを用い、育児体験認知への影響に関する仮説モデルを構築し、これらの因果関係について、そのモデルの適合度を共分散構造分析で検討した。

（結果）

研究Ⅰでは、妊娠・出産トラブル体験記憶がある母親は育児不安感が有意に高く、育児自信感も有意に低く、日頃の子どもの様子も有意に否定的に認知していた。また、妊娠・出産トラブル体験記憶がある母親は自己価値感が有意に低く、自己抑制型行動特性が有意に高かった。

研究Ⅱでは、妊娠・出産体験のトラブルを診療録の記録とその記憶を照合した。その結果、カルテに記載されたトラブルはないが妊娠・出産トラブルがあったと想起する群とカルテにはトラブルがあったがその事実を想起しない群に有意に差が出た。後者の群の方が育児不安感も有意に低く、育児自信感も有意に高かった。一年後の追跡調査では、育児自信感のみ有意差がみられた。

研究Ⅲでは、共分散構造分析により母親の妊娠・出産体験記憶と自己イメージと育児体験認知の関連を示す因果関係仮説モデルの適合度を検討した結果、概ね当てはまりの良いモデルが得られ、「妊娠・出産記憶」が「育児体験認知」に対し負の影響を与え、良好な「自己イメージ」は「育児体験認知」に対して正の影響を与えるというモデルが構築された。

（考察）

研究Ⅰの結果から、妊娠・出産期のつらい体験を解消できず、その時期をうまく乗り越えられなかった母親が、育児期においてもその積み残された課題に直面しているのではないかと考えられた。また、否定的な自己イメージをもつ母親は、妊娠・出産体験においてトラブルがあったと記憶していた。自分に自信がなく周囲にあわせるために自己を抑えるという否定的な自己イメージが、妊娠・出産体験を想起した際に、自分に自信がないが故に妊娠・出産もトラブルがあり、つらい体験となって、それを乗り越えることが出来なかったという喪失感があるのではないかという推察もできた。

研究Ⅱでは、診療録にはトラブルが記載されたが、その記憶を想起しない群と、診療録にはトラブルが記載されていないが、その記憶を想起する群において、育児体験認知に有意な差がみられた。後者の群が、育児不安感が有意に高く、育児自信感が有意に低かった。育児が楽しい、母親として

の自信があるという望ましい母親像を描いている母親は、妊娠・出産体験もトラブルがあったとしてもそのことに対処できたために、トラブルがなかったと肯定的に想起しているのではないかと推察する。一年後の前向き調査では、育児自信感のみ有意差がみられた。本研究では、妊娠・出産期の肯定的な想起が、一年後の母親の育児への自信感にも影響していると推察できた。

研究Ⅲでは、妊娠・出産のトラブルがあったという記憶は、育児に対しても負の影響があったが、共分散構造分析より直接的な影響よりも、自己イメージを介しての影響の方が強かった。つまり、育児への肯定的な認知は、自分自身への高い価値感などの肯定的な自己イメージであるとの結果であった。肯定的な自己イメージの母親は、育児上で不安や戸惑いを抱える場面があっても、すぐに幸せを見出すことができると考える。また、前向き調査の結果、高い自己価値感を抱いている母親は、一年後も育児に対して肯定的な認知をしていた。既存の妊娠・出産期における母親支援は、出産における母親のその体験への評価の変容である。しかし、その妊娠・出産体験をどのように認知するかは自己イメージが影響しているため、妊娠・出産体験を肯定的に評価するためにも自己イメージの変容支援が必要である。

本研究から、妊娠・出産体験を肯定的に認知するためには、肯定的な自己イメージが重要であること、また、育児不安の軽減を考える際にも、母親の自己イメージが影響することが示された。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究は、妊娠・出産・育児をめぐって解決すべく様々な社会問題がある中で、未就学児をもつ母親の妊娠・出産体験から育児体験認知を横断的および縦断的に調査した研究であり、重要なテーマを扱った研究である。先行研究では、出産体験の評価に関しては、出産直後との関連を明らかにするものが多いが、本研究では、妊娠から育児という長期的な視野で検討しようと試みた。また、母親の自己イメージに着目し、新たな育児支援としては自己イメージ変容支援が必要ではないかという提案をしている。

課題として、研究課題Ⅱにおける対象が特徴を有する一つの産科医院での調査になっており、一般化するには限界があるため、今後複数の産科医院での調査を進める必要がある。また、研究課題Ⅲにおいて、仮説モデル構築を行ったが、横断研究のデータによる因果関係モデルのため、推定の域はでない。モデルの検証のためには、前向き調査を進めること、あるいは、介入研究を行うことで証明していく必要がある。そして、新たな育児支援としての自己イメージ変容支援を確立していくと良いであろう。

平成 26 年 1 月 10 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。